

## 木鐸秋臨時号を！

ちまたでは、映画、国宝がロングランで上映されています。身近な人物に聞くと、3回みた。良かった、もう一度鑑賞したいという意見があり、そこまで云うならと、私も御多分に漏れず、鑑賞しました。上映時間が午前の1回きりということもあり、たくさん的人が劇場内にいました。評判を聞いた人が鑑賞に来ているのでしょう。

評価・感想ですが、この映画、青春、恋愛、墮落、栄光、親子愛等の要素を取り入れ、なおかつ、芸術の歌舞伎を題材にして、タイトルも国宝として、意味深な作品像を漂わせています。この時点で観客を虜にして、完全に監督の世界に引っ張り込んで、青青、墮落、挫折、栄光、愛を要所、要所に組み込むことにより、鑑賞者が興味をそそり、じっくりと考える時間を与えず、目まぐるしく、テンポよく展開しているので、見る人にとって、自分の興味ある場面、ストーリーが潜在的に意識されつつ、鑑賞しているので、見る人すべての人の要求を満たしてくれる作品となり、好評であり、なおかつ、「国宝」と云うタイトルの持つ社会的意義と価値観が同調して、長時間の鑑賞実績から、観客にとっても、にわか芸術評論家でなった錯覚を覚えさせ、高評価に繋がったかもしれません。われも、われもと映画館に足を運び、見終わって、よかったです、感動した、芸の道の厳しさが分かったと、絶賛の声を上げるのでしょう。

この映画の、どこさ、迫力そして、展示良さ、メリハリもあした状態で鑑賞出来たという間に終わっていました。と、ありきにお任せします。

私の感想は、と云うと、何か不足していたように思われます。何が不足しているのか？よくよく考えると、鑑賞する側に涙が不足していた事です。涙が不足？どういうこと？

3時間余りの上映時間、涙が一滴たりとも私の瞳から、零れ落ちる事は無かったです。これは、どういうことかと説明すると、普通、映画を見て涙を流すと云うことは、鑑賞者が優位性を提示しているのです。監督の映画は、私も理解しているのですよ。監督の気持理解できますよ。という。鑑賞者に余裕があり、監督の意味するところを理解していますよ！と、おこがましく、監督と同一線レベルで、同調、感動する心のゆとりがあると云うことです。同じ土俵、同じ目線ですよ。と云うことです。話は変わりますが、世間で、よく聞きます、本当に悲しい時は涙も出ないと。と言われますが。まさに、このことで、鑑賞者（私に）に余裕、優位感を与えるなかった。監督の思惑に完全にはまったと云うことです。アウエーで戦っているようなものです。監督が、これでもか、これでもか。と機関銃を連射しているようなものです。その連射された銃弾を受け止める事、避ける事が出来なく、打たれるまま、好き放題にハチの巣にされたようなもので、それも、機関銃ではなく、国宝というとんでもない大砲を機関銃のように連射されるような感覚です。歌舞伎という母船から、青春、墮落、栄光、親子愛という、ミサイル、大砲を次々と発射してくれるものだから、涙流しているどころの場合ではないのです。受け止める事が出来ず、監督の十中八九にはまったわけで、涙の出る隙も与えられなかったと云うことです。

本来、栄光、墮落、青春等の題材を持ち出し、場面場面を深堀すると、涙があふれ出ても不思議ではありません。各国の自慢の料理をならべられ、それを食べた者が、「美味しい」という言葉を失うほどの料理で、食べ手を圧倒しているようなものです。具の根も言わせない。まさに、この事でしょう。

監督、俳優メンバーに対し白旗です。涙が一滴もでなかった。完敗です。でも、私は悔しいと同時に感謝です。

ところで、

私の國宝は、希望の涙、悔しき涙、自分自身を鼓舞する涙、相手を思いやる涙、未来にかける涙が、國民ひとり一人が何らかの形で、これらの涙をしっかりと持ち抱ける人々が住んでいる國こそが、國の宝であると思わずにいられない映画日和となりました。では、

ばく  
木  
たく  
鐸

編集・発行  
はな・居宅介  
護支援事業所